

## 自生種子利用によるオオクサキビの栽培法

### 2) 自生種子の出芽時期と生育収量

徳永初彦・茨木和典・小山信明

(九州農業試験場)

オオクサキビ(大分系)について、自生種子(自然落下種子)を利用した栽培法を確立するため、一連の試験を実施している。本報では自生種子の出芽状況、出芽後の生育および収量性を検討した結果を報告する。

#### 試験方法

- (1) 供試草種：オオクサキビ(大分系)
- (2) 供試種子：昭和51年産自生種子
- (3) 播種量(自生種子量)：a 当たり2.5kg(推定)
- (4) 施肥量：基肥…a 当たり窒素1.0, 燐酸2.5, 加里1.0kgを4月2日(出芽期)に施す。追肥…刈取り後窒素1.0, 加里1.0kg(成分量)を施す。

#### 試験結果と考察

(1) 出芽時期と出芽数：自生種子は日平均気温が10℃以上となる3月末一斉に出芽した。その後出芽数は急速に増加して4月15日最高に達し、約5,300本/m<sup>2</sup>を確保した(第1表)。

(2) 草丈伸長：草丈は4月下旬から急速に伸長し、5月2日には約10cm, ローズグラス, グリーンパニックなどの播種期に当たる5月中旬には約18cmに達した。

(3) 初期生育：草丈の急速伸長に伴い生育量(m<sup>2</sup>当り生体重)は2次曲線的に増加して、5月2日には886g/m<sup>2</sup>となり、メヒシバ(強喜草)の生育量6g/m<sup>2</sup>を大きく上回った(第2表)。

(4) 刈取り時期と再生状況：1番草は出芽期後76日目の6月11日、極めて早い時期に刈取った。その後は約30日間隔で4番草まで刈取り、9月上旬に刈り終わった。刈取り後の再生は極めて良好であった。

(5) 乾物収量：刈取り時期別収量は第3表のとおりで各番草とも300kg/10a以上をしめた。とくに、1番草と高温・多照条件下で生育した3番草が高く、そのため総収量は1,500kg/10a以上を得た。

(6) 雑草との競合：早期出芽と多数発生により早くか

ら葉面積を拡大して5月2日には葉面積指数が3.0以上となり、メヒシバを完全に被圧した。

第1表 オオクサキビとメヒシバの発芽状況 (本/m<sup>2</sup>) (1977年)

種類 \ 調査期日(月日)	3・27	4・1	4・7	4・15	4・18
オオクサキビ	230	3,270	5,093	5,338	5,313
メヒシバ	0	20	33	113	140

注) 0.04m<sup>2</sup>12か所調査。メヒシバは雑草。

第2表 生育初期の生体重増加 (g/m<sup>2</sup>)

種類 \ 調査期日(月日)	4・8	4・15	4・20	5・2	5・20
オオクサキビ	19	57	138	886	2,387
メヒシバ	0.14	0.26	4.3	5.5	110

注) 0.25m<sup>2</sup>調査。メヒシバは雑草。

第3表 刈取り時期と収量 (1977年)

番草	刈取り時期(月・日)	生育期間(日)	10a 当り収量(kg)	
			生草重	乾物重
1	6・11	76	3,875	519
2	7・13	32	2,454	334
3	8・8	26	2,904	412
4	9・6	32	1,928	303
合計		166	11,161	1,568

注) 0.25m<sup>2</sup>2か所刈取り調査

(7) 以上のように、オオクサキビ(大分系)の自生種子は早期に多数出芽する。そのため、出芽後も雑草に被圧されず順調に生育する。再生も良好で早期に多量の収量を得るので、自生種子利用による栽培は極めて有利である。